第 19 回　優秀賞(銀賞)受賞作品

「自販機」

沖縄県立小禄高等学校二年　　大城　涼佳

賢　治　の　ま　ち　か　ら

全国高校生☆童話大賞

優秀賞〈銀賞〉

『自販機』

沖縄県立小禄高等学校二年　大城涼佳

「あれ？　こんなのここにあったっけ……？」

目の前には見たことのない赤い自販機が、暗い秋の夜を照らしながらポツリと佇んでいた。（今日の朝、学校に行く時にはここに自販機なんてなかったはずなのにな……）私は首を傾げながら朝の記憶を辿っていく。その自販機は何故かとても奇妙に見えた。その異様な雰囲気の正体を私が突きとめるのに、そう時間はかからなかった。商品のラインナップが「幸せ」や「学力」など見たこともないものばかりだったのである。

「幸せとか……なんなのこのラインナップ……」

一つ一つのラインナップを確認していると、ふととある言葉が目に入ってきた。

貴方の思い通りの人生に

そう書かれていたのだ。（買おう。）私は真っ先にそう思った。「幸せ」の飲み物を買って飲んだら幸せになれるかもしれないから買う。とかそういうことじゃない。淡々と流れていく「日常」の中に突如現れた「非日常」を逃がしたくなかったのだ。私は効果には期待もしていなかったので、とりあえず「お金」の飲み物を買うことにした。値段は三千円と飲み物にしてはかなり高い。しかし、私はさほど躊躇もせず千円札を三枚入れボタンを押した。出てきたペットボトルのラベルには「金」と書かれていた。（なんか……やらしいな……）私は微笑しながらキャップを開けた。味はというと……普通のエナジードリンクだった。口にエナジードリンクを含みながら、まじまじとラベルを眺めてみる。すると、下に小さな文字でこう書かれているのを見つけた。

このシリーズの飲料水を過剰摂取した場合、体に支障をきたす場合があります。飲みすぎにはご注意下さい。

「シリーズ」とは、この「幸せ」とか「学力」だとかの意味の分からないラインナップのことだろう。私は特に気にも留めなかった。なぜなら、このシリーズを買うのは最初で最後。そう思っていたからだ。

「ただいま」

ドアを開けるととても良い匂いがした。

「おかえり」

キッチンから母の声がした。料理をしているのだろう。さっきの良い匂いの正体は母の料理の匂いに違いない。

「お母さん、さっきね家の下に変な……」

「そういえば！」

私はさっき見つけた奇妙な自販機の話をしようとしたが、母によって遮られてしまった。

「ついさっき、お祖母ちゃんが家に来てね。えーっと……透佳が帰ってくる十五分くらい前に！　それで透佳にお小遣いくれたから、後でお礼の電話入れとくんだよ！」

「えっ……」

思考が一瞬停止した。

「貰ったお金は透佳の机の上に置いてあるからね。きちんとお財布にしまうのよ」

「……」

「おーい、聞いてるー？」

母がキッチンから顔を覗かせた。

「あっ、うん！　わかった！」

（なんでなんでなんで）頭の中はパニック状態だった。しかし、母に怪しまれてはならない。と、できるだけ普通の対応をした。（あの自販機の話、誰にもしちゃダメだ。）私は咄嗟にそう思った。（あの自販機が偽物ではなく本物だとしたら……！）色んな考えが頭をよぎる。私は足早に自室へと向かい、ドアを閉め鍵をガチャリとかけた。相変わらず部屋は絵で溢れかえっている。一人になれた安心感からか、その場にへたりこんでしまった。

「これ……本物なの……？」

右手に握りしめたままの「金」とかかれたペットボトル。そして机の上に置かれている「お金」……。これは偶然なのか？　いや、あの厳しいお祖母ちゃんがお小遣いをくれるなど今までにあっただろうか。自販機のラインナップが頭を流れる。もしあの自販機が本物なら私は今、全てを簡単に手に入れてしまう立場にいるのだ。そう思った瞬間、感じた事のない感情が押し寄せた。それが、恐怖なのか高揚感なのか……考える事はしなかった。

「明日、買いに行こう……」

私はボソッと呟いた。明日もう一度買ってみて、効果が現れなかったら偽物だ。現れたら……本物だ。

翌朝、私はまたあの自販機の前に立っていた。ラインナップは昨日と変わっていない。

「何を買おう……」

今日はこの自販機が本物なのか偽物なのかを見分けるために高いお金を払って飲み物を買うのだ。効果の有無が分かりやすいものを買うのが妥当だ。（ここはやっぱり、運動神経か……）運動音痴の私にとって、一番効果が分かりやすいのは「運動神経」だった。値段は二千五百円と昨日より五百円安い。私はお祖母ちゃんから貰ったお金を自販機へと入れ、ボタンを押した。自販機から出てきたペットボトルのラベルは青色で、白い文字で「運動神経」と書かれている。味は……普通のスポーツドリンクだった。（これで本当に運動神経が良くなるのか……？）昨日の事があったといえど、まだ効果については半信半疑だった。

「うーん……。よく分からないな……」

私はなんとなく腕時計に目をやった。

「やっば！」

時刻は八時三十二分。家から学校が近いといえど、焦らなければいけない時間だった。慌ててペットボトルを籠に入れ自転車を漕ぎだした。ペットボトルは自転車の振動で揺れている。（今日の体育は三校時……。そこで全てが分かる）

家に帰ってきた私は昨夜同様、自室でへたり込んでしまった。効果が凄まじかったのだ。いつもはタイムが三十分台の持久走が十八分台になった程

だ。（いつもは私をいびる阿川もとても興奮してたな……）嫌いな体育教師の顔を思い浮かべながら、そんなことを考えていた。先程机の上に置いたペットボトルをじっと見つめる。（間違いない。本物だ）あの自販機は本物で、様々なラインナップから自分の欲しい能力やものを与えてくれるのだ。私は激しく高揚した。まるで、この世界の全てを手にしたかのように。いいや、あの自販機さえあれば手に入れられないものなどないのだ。

「そうだ……！」

私はガバッと立ち上がり、机の上にあるスケッチブックを取り出した。

「やりたいことリスト」そうでかでかと書いた。

お金持ちになりたい。頭が良くなりたい。周りの人から認められたい。甘酸っぱい青春がしたい。永遠に辛い事を無くしたい。

己の欲望をひたすらにスケッチブックに書き続ける。青春だとか頭が良くなりたいだとか、思いつくものは案外ちっぽけなもので、やっぱりまだ子供なんだなと思った。一通り書き終わったところでスケッチブックを見返す。ざっと二十は書き留められているが、どれもしっくりこない。三秒ほど頭を悩ませたところで、

「あっ……」

と声が漏れる。

・立花さんと仲良くなりたい。

そう書いた。今の自分が最も求めていること。立花さんは私の憧れのクラスメイトだ。頭脳明晰、容姿端麗、運動神経抜群、センスもズバ抜けていて、まさに本から飛び出してきたような人だ。口元の黒子が魅力的で、友達のいない私にとっては雲よりも遠い存在だ。（そんな人と仲良くなれるかもしれないなんて……）私は財布を強く握りしめ、家を飛び出した。そこから私が立花さんと仲良くなるのに、そう時間はかからなかった。立花さん並みの学力が欲しければ買ったし、上手く会話する為にコミュニケーション能力も買った。立花さんの隣に並んでも恥ずかしくないようにと、美貌も買った。私のお金が無くなっていく代わりに、立花さんからは「友情」という名誉が与えられたのだ。周りのクラスメイトや先生からも一目置かれ、今までとは真逆の最高な高校生活を送っていた。「貴方の思い通りの人生に」まさにあのキャッチコピーの通りだった――。

「水瀬さん……最近どうしたの？」
たった目の前には美術予備校の先生、本堂先生が座っている。授業終わりに私だけ呼び出されたのだ。
「前までの作品はどれも目を見張るものがあったけど……最近の作品の調子は良くないみたいね……。前よりもかなり雑な仕上がりになっているわよ」
「はい……すいません」
「水瀬さんは美大に行きたいんでしょ？　貴方の為を思ってはっきり言うけど……今のレベルじゃかなり難しいことを覚悟しておいた方が良いわ」
それはあまりにも重すぎる言葉だった。
「家でもきちんと絵を描く練習するのよ。もう夜も遅いわ。気をつけて帰るのよ」
本堂先生は優しく微笑（ほほえ）みかけた。
「はい……分かりました。さようなら……」
私は鞄（かばん）を握りしめ夜道を歩いた。『今のレベルじゃかなり難しいことを覚悟しておいた方が良いわ』、言われた言葉が頭の中で繰り返す。（前までは合格できるレベルだって言われていたのに……どうしてこんなに画力が下がったの……？　それもこんな急に……）
「水瀬さんは進路どうする？」
私はふと、少し前に立花さんが急にそんな事を聞いてきた事を思い出した。あの日は確か、とても寒い日だった。
「ほら水瀬さん、頭も良いし運動も出来るでしょ？　そんな水瀬さんは、どんな進路を希望しているのかとちょっと気になって……」
私は急にそんな事を聞かれたのに対して少し驚いたし、あまりにも褒（ほ）めてくれるので照れくささも少しあった。
「いやいや、完璧なのは立花さんの方でしょ！　勉強面でも運動面でも勝てたことなんて一回もないよ！」
私はヘラッと笑いながらそう言った。
「まー……進路は美大に行けたら良いな。とは思っているけど……」
「美大!?」

立花さんは目をぱちくりとさせている。予想以上に良い反応だったので私は少し嬉しくなっていた。

「ん……まあね」

「凄いね、水瀬さん！」

「そんなことないよ。立花さんの進路は？」

「私は大学進学かな……？」

「どこの大学？」

私が首を傾げると立花さんが「耳貸して」と手招きした。立花さんの志望大学を聞いた時は、開いた口が塞がらなかった。超有名難関大学として知られている大学だったからだ。

「皆には内緒だよ」

そう言うと彼女は、黒子のある口元に人差し指を立ててはにかんだ。その姿はまるで絵のように綺麗だったことを覚えている。

（今の自分、すごく情けないな……）あんな会話をしていた時は美大に受かるものだと思っていた。しかし現実はそうはいかなかった。

「プルルルルル　プルルルルル」

ポケットのスマホから突然音が鳴った。スマホを取り出して確認してみると、立花さんからの電話だった。正直嬉しかった。さっきまで立花さんとの会話を思い出していたせいか、無性に声が聞きたくなっていたのだ。それに、落ち込んでいる時こそ親友の声が聞きたい。

『もしもし水瀬さん？　ごめんね、突然電話しちゃって』

「ううん、大丈夫だよ。どうかした？」

立花さんの声はいつもとは違って少し興奮しているようだった。

『実はね……前受けた模試で第一志望の大学がA判定だったの！　まあ、まだ油断はできないんだけどね……。けど、すごく嬉しくって！　親友の水瀬さんにはすぐに教えなきゃって思ってさ！』

その瞬間、辺りが暗闇に包まれたかのようだった。立花さんの志望する大学名を思い出す。私とは比べ物にもならないレベルだ。友達の喜ばしい話を喜んであげないのは最低だと分かっている。しかし、私の心は張り裂けそうだった。

「へ、へぇ……そうなんだ……おめでとう」

きちんとお祝いの言葉が言えただろうか？違和感はなかっただろうか？耳に当てたスマホからは、立花さんの嬉しそうな声が聞こえ続けたが、何を言っているかはもう分からなくなっていた。なんて返事したかも覚えていない。気付くと私はまた、あの自販機の前に立っていた。暗闇にポツンと佇む自販機の明かりは、私には絶望の中の唯一の希望の光に見えた。自販機をまっすぐに見つめる。ラインナップはいつもと同じ……ではなかった。

「何……これ……」

合格合格合格合格合格合格合格合格――ラインナップが全て「合格」になっているのだ。その異様な光景は、私に買えと脅迫（きょうはく）しているようだった。値段は一万円。今までに比べてもかなり高い。しかし私はすぐに財布を鞄から取り出した。（買うしかない。ここまで来たら、もう後戻りはできない……）一万円札がするすると自販機に吸い込まれていく。ピッと音が鳴り、ボタンが赤くなる。その色さえも早く早くと急（せ）かしているよう感じた。正直怖かった。取り返しのつかないことをしているようで。

『透佳は本当に絵が上手ね』

『水瀬さん、貴方かなり良い絵描くわね』

いつも私の絵を褒めてくれた母と本堂先生の顔が浮かぶ。今まで私は、美貌や学力は買ってきたが、決して画力とセンスは買わなかった。自分の絵に自信を持っていたからだ。唯一の取（と）り柄（え）、それが私にとっては絵だった。しかし今、その取り柄さえも失ってしまった私には「買う」という選択しかなかった。これで美大に合格すれば不正のようなものだろう。いいや、完全に不正だ。そんなことはもう分かっていた。ボタンを押そうとする手が震える。今までは躊躇なんてしなかったのに。

「ピッ」

音が聞こえた。ボタンが赤くなる音。先程聞いた音とは少しだけ違っていた。ふと音の鳴った方を見てみると「自分」と書かれている新しい商品があった。右端にちょこんと一本だけあるそれは、とても存在が薄く、前までの私のようだった。

「え……自分……？」

値段は百円。いたって普通の値段だ。（自分を得られる……？　どういうこと？）私は「合格」の事などすっかり忘れ、「自分」に全ての意識を持っていかれた。

「もしかして……」

自販機に反射した自分が目に入った。顔も変わり、内面も変わった私。唯一（ゆいいつ）の取り柄、画力さえも失った私。そこに映っていたのは「自分」ではなかった。ない要素をただ飲み物で取り入れただけのロボットだった。そもそもなぜ私の画力は急激に落ちたのか。ふとそんなことを考え始めた。

「あっ……」

私はラベルに書かれていた文を思い出した。

このシリーズの飲料水を過剰摂取した場合、体に多少の支障をきたす場合があります。飲み過ぎにはご注意下さい。

（もしかして、過剰摂取したから……？）そう分かった時、恐怖を感じた。私が自販機に乗っ取られている。そんな気がしたのだ。もう一度「自分」に目をやる。先程までは気付かなかったが、小さな文字で「本製品は、失った能力をもう一度元に戻すものではなく、得た能力を無くす製品です」と書かれている。要するにこれを買っても、私の画力は返ってこない、ということだ。となれば「合格」を買うしかない。

「ふざけるなふざけるなふざけるな！」

自分でも驚くほどの声が出た。

「こんな……こんな自分なんていらない！」

私は今まで自分の意思で欲しい能力やものを買ってきた。そのくせ自販機に八つ当たりするのは間違っているだろう。しかし、この思いをぶつける相手が欲しかった。ただそれだけだった。私は「自分」のボタンを押した。キャップを開けグビグビと「自分」を飲んだ。味は普通の水だった。

「ゲホゲホゲホッ！」

気管に思いっきり水が入ってしまい、咳（せき）が止まらない。気付けば目の前の自販機は消え、辺りは暗闇に包まれていた。目から涙が溢れる。それが安堵（あんど）からくるものなのか、後悔からくるものなのかは自分でも分からなかった。

（明日からまた、楽しくない高校生活に戻るのだろう。この顔も元の醜い姿

に戻るのだろう。体育教師、阿川にもいびられ続けるのだろう。美大も今からじゃ落ちるのだろう。立花さんとも……元の関係に戻るのだろう）ただそんな事を思った。

「ははっ、寒過ぎ」

全てが馬鹿らしくなり笑えてきた。顔を上げ夜空の星を見つめる。（絵……描きたいな……）そう思った。吐息はとても白かった。まるでまっさらなキャンバスのように……私のように……。

狭く暗い路地裏、赤い自販機の前に制服を着た一人の少女が立っていた。一万円札を躊躇なく自販機に入れた彼女は「合格」と書かれたペットボトルを口に運ぶ。小さく微笑む美しい彼女は、口元の黒子が印象的だった。